

くなり生活は楽になった。しかし飲料水は買い求めなければならぬ水不足の生活だった。昭和二十八年三月二十日、突然の帰国指示により上海港を出港、二十四日東舞鶴に上陸して歓喜の帰国をした。しかしそれも束の間だった。とにかく就職しなければと国鉄に履歴書持参の日参をしたが受け入れられなかった。私の実家に身を寄せて、東京での配管工をしながらの惨めな暮しをした。昭和二十九年に県営住宅に入居することができて、さらに町内の製麺工場に勤めるようになり、ようやく生活基盤も安定した。長女も良縁に恵まれ、長男も県職員になり、現在、私は厚生年金の受給の恩恵もあって、苦勞した妻と共に幸福な余生をおくれるようになった。

自分で選んだ道とはいっても、満州での戦後の強制残留で、三十歳台であった私の八年間の空白のために人知れぬ苦勞を積んだことになる。

女学生の私の恐怖の体験

福島県 藤井 貞

私達が渡満する三年前に父が第一の職場として渡満した。日本と満州の政府合同会社の「満州拓殖公社」である。父のいる北滿北安省北安に行く嬉しさはあったが、船はいつでも爆撃されるかという不安があった。なんとかぶじに北安に着いたが、三年ぐらいで裸になり、乞食同然の姿で帰国するなど思いもよらなかった。しかも、日本の歴史上かつてなかった敗戦、それに外国での敗戦の悲惨さを私達子供も体験させられたのだ。当時の記憶は半世紀も前のことだが、しっかりと昨日のようによみがえってくるのである。

ソ連の満州侵攻後、日本人がどれほどくやしい思いをしたことか。若い娘達は連れ去られ、「助けて」という声にも、どうすることもできなかった。「無条件降伏」という情けなさであった。銃をバンバンと発砲し、中国人と

ソ連軍隊とが私達日本人住宅を取りかこんだ。すきを見て山に逃げ、ぼう然としているところまで中国人が追いかけてきて、マサカリを振りあげたのを止めさせようとする日本人のお母さん、ここから恐怖の毎日が続くのである。

つぎの日、わが家にもどり、かくしておいた財布と衣類をいそいで持ちかえった。四、五日後は、土台石だけに、すっかり家ごと消えてしまった。まったく驚きであった。もう住む家もない、食べる物もない、金もない「裸の王様」となり、馬小屋にゴザを敷いて何日か過ごした。

やっと南下するということになったとき、いよいよ日本に帰れると思った。「ああ、翼があったら飛んで帰れるのに」と思ったものだ。屋根のない貨車で出発した。山中にかかると、馬賊とか匪賊が出るのだと聞いていたが、なんとか新京にたどり着いたときは五歳以下の子どもは一人も生き残れなかった。

新京の大きな小学校の校庭がデコボコだった。そこは墓地と化した。

地球上から抹殺されずに、生命あって帰国できたが、ある開拓団の方々は服毒自決されたとか、残留孤児になったとかと思うと胸が引きさかれるのを覚える。戦争はやるべきではない。今日の平和はこのような犠牲の上に立っての平和であることを忘れてはなるまい。まだ戦争はおわっていない。「戦争を知らない若い世代」にこのことをしっかり伝えて行くべき役割が私達にあるということを感じているものである。――北安高等女学校三年在学夏休み中のことであった。

開拓団診療所長そして死へ逃避行

福島県 柴田 正雄

富山県から北海道に移住した働くことしか楽しみのない父と、教育にきびしい母に育てられた。北海道の開拓は不毛の大地を切りひらき、悪戦苦闘の貴い汗の結晶によるものと信じている。私の生家も例外ではなく、豪雪、冷害との苦闘の連続であった。逆境の中で成長するにつ